

薩摩盲僧琵琶の誕生と展開 —平家琵琶から薩摩盲僧琵琶へ、そして薩摩琵琶へ—

薦田 治子

1. はじめに

この小論では、近世の南九州地方で、平家琵琶から薩摩盲僧琵琶が生まれ、そして近代薩摩琵琶へと変化していく過程を、楽器の形態上の特徴から明らかにしたい。

日本の琵琶には、大きく見て4つの種類がある。雅楽琵琶、平家琵琶、盲僧琵琶、近代琵琶（薩摩琵琶・筑前琵琶）である。雅楽琵琶は西アジア起源の四弦曲頸の琵琶が雅楽合奏の楽器のひとつとして西暦700年以前に伝來したもので、今日まで雅楽で用いられている。平家琵琶は、雅楽琵琶を真似て、民間の盲人音楽家である琵琶法師が用いた琵琶である。《平家物語》の伴奏に用いられ、形態的には小型の雅楽琵琶に一柱（フレット）を足したものとなっている（薦田 2003: 319 - 323）。

盲僧琵琶の起源については、従来、古代に雅楽琵琶と異なる琵琶が日本に伝來したという説（田辺 1947: 194、1956: 8巻 324 - 325、1964: 83 - 89）が広く受け入れられてきた。しかしこの説は、17世紀から18世紀に盲僧自らが作った起源伝承を無批判に受け入れたものである。

平家琵琶を演奏する当道座の琵琶法師と、盲僧琵琶を演奏する盲僧は、元来同根であり、近世初期にいたるまで両者の生業には明確な区別はなかったという説を、岩橋小弥太が発表したのは1923年（岩橋 1923a: 15 - 26、岩橋 1923b: 113 - 120）である。その後、盲僧研究の進展により、盲僧座は、当道座への参加を拒んだ一部の琵琶法師が、100年におよぶ当道座との抗争を経て、天明期（1781 - 1789）に本寺を獲得して組織化に成功した琵琶法師座であることが明らかになってきた（たとえば西岡 1996: 27 - 29）。近世初期までは、両者とも同じような生業にたずさわり、その呼称にも明確な区別はなかったのである。そのような時代に盲僧固有の楽器があったとは考えにくい。盲僧が、当道座頭と区別されるようになつた18世紀に、盲僧琵琶が生まれたと考えるほうが自然であろう。

現存する盲僧琵琶にはさまざまな形態のものがある。2001年から2005年にかけて、九州地方の50面近い盲僧琵琶を調査した結果、盲僧琵琶は、どれも雅楽琵琶や平家琵琶に比べて柱（フレット）が高いという共通点があきらかになってきた。そこで、もし盲僧座の本寺獲得運動が展開された18世紀に、琵琶の柱が高くなつた理由を見出しが出来れば、盲僧琵琶の誕生が説明できると考えた。その結果、延宝2年（1674）に当道座が幕府の権威を後ろ盾に、当道座に属さない琵琶法師に芸能活動を禁止したことが、琵琶の形態の変化に関係があるのでないかと思い至つた。この禁令の発布は、盲人史の中ではよく知られている事件である（中山 1934: 367 - 369、加藤 1974: 264 - 265）。その折に禁止された楽器のなかに三味線があった。三味線は16世紀に日本に伝來し、短期間に人々の人気を得て、江戸時代の音楽の中心的な役割を担うようになった楽器である。芸能活動を禁止され、建前上は宗教活動を表看板とするようになったとはいえ、三味線が使えないことは、盲僧たちにとっても大きな痛手であったに違ひない。困った盲僧たちが、使用の許された琵琶を、柱を高くすることによって、三味線音楽が演奏できるように改造したと考えれば、盲僧琵琶の誕生の動機が説明できる（薦田 2003: 314 - 329）。そして、この仮説が正しければ、古い盲僧琵琶ほど平家琵琶に似た形態を示すはずである。

筆者が2001年から九州各地の盲僧琵琶の調査を行つた結果は、すでに他所で発表したが（薦田 2004a: 7 - 32）、この小論では、それらの中から鹿児島県日置市の『宝山検校の琵琶』と伝えられる古い盲僧琵琶と、日南市長久寺所蔵の薩摩盲僧琵琶を紹介し、それらを平家琵琶および近代薩摩琵琶と比べ

ることにより、平家琵琶から盲僧琵琶へ、そして近代薩摩琵琶へと楽器の形態が変化していった様子を具体的に示したい。

以下では、本考察の対象とする4面の琵琶（盲僧琵琶2面、平家琵琶、薩摩琵琶）の成立と伝来について紹介し、その上で、計測と観察によりあきらかになった各琵琶の特徴の比較を行う。

2. 中島常楽院と「宝山検校の琵琶」—古い盲僧琵琶—

中島常楽院には、「宝山検校の琵琶」と伝えられる古い琵琶が一面ある。近年修理され、現在は日置市吹上町歴史資料館に寄託されている。

宝山検校は、薩摩盲僧の祖とされる人物である。現在、南九州地方の盲僧たちは、天台宗盲僧派常楽院法流に所属する。常楽院法流に属する盲僧寺院にまつわる伝承や古文書をあつめて記された『常楽院沿革史』によると、中島常楽院は、鎌倉時代初め島津忠久が薩摩に封じられるときに都から伴ってきた盲僧宝山検校が伊作中島（現日置市吹上町）の地に建立した盲僧寺院であると伝えられる（江田 1932: 58）。江戸時代になると、常楽院は鹿児島城下に移転し、他の九州地方の盲僧が青蓮院の支配を受けたときにも、例外的に上野寛永寺の配下にあって、薩摩藩の盲僧を統括した。中島の地は、常楽院が城下に移ったあとも、「常に名徳ある盲僧を住持として歴代の供養に勤め或は古来の威徳を発揚するを事とし連綿として今日に及」んでいるという（江田 1932: 158）。

宝山検校が実在したかどうかは確認できないが、江戸中期に盲僧の本寺獲得運動の影響を受け、薩摩地方の盲僧の由来が記される際に、優れた過去の琵琶法師として人々に記憶されていた人物だったのであろう。伊作の地は、初代薩摩藩主島津家久の祖父、忠良（1492 - 1568）の出身地である。忠良は、文武両道に優れた郷土の偉人として近世・近代を通じて鹿児島の人々の尊敬を集めている。薩摩藩の盲僧を統括する常楽院の祖宝山検校を伊作に結びつけたのも、そのことと関係があるのでないだろうか。

中島常楽院は、現在、無住となっているが、境内には、文化6年（1809）に建立された宝山検校と家村大光院の墓が並んで残っている。大光院は島津家久に薩摩・大隅・日向の盲僧の総家督を任じられた江戸時代初期の盲僧とされる（江田 1932: 128）。現在も毎年10月12日に宝山検校と家村大光院の供養のために「妙音十二楽」という法要が常楽院法流の盲僧たちにより中島常楽院で行われ、この行事は県の無形文化財にも指定されている。

宝山検校を薩摩盲僧の祖とする伝承は、墓石の建てられた文化6年には確立していたはずであるから、「宝山検校の琵琶」は、すでにそのころに古びた状態となって中島常楽院にあったと推測される。その製作年代は18世紀の半ばを下るまい。近年の修理はあったものの、薩摩盲僧琵琶のなかでも成立の古いものと考えてよいであろう。

この琵琶の胴と腹板、覆手、反手はオリジナルである可能性が高い。木材の傷みは塗が施されていることもあって、あまりめだたない。4本の転手、6つの柱、第Ⅱ、第Ⅳ弦の通弦孔周縁装飾（猪目）は、古い写真には見られないので（村山 1978: 22）、最近の修理により補われたものと考える。半月周縁は、幅約2mmほどで少し彫り込まれているので、かつて象嵌の装飾が施されていたと思われる。撥面は黒漆で塗られ、朱の漆で花模様の線画が描かれている。また腹板、頸前面と海老尾が、赤味が勝った漆で塗られ、撥面と頸背面から遠山までが、黒漆で塗られている。撥面に絵を描いた薩摩盲僧琵琶は他に例がなく、撥面には弾奏痕が見られないので、演奏されなくなつてから、「宝山検校の琵琶」にふさわしく漆を塗りなおし、大切に伝えたものかもしれない。頸前面は、近年の修理のときに塗り直しているようである。

3. 長久寺（日南常楽院）の盲僧琵琶 一薩摩盲僧琵琶の典型一

楽器としての薩摩盲僧琵琶は、現在は使われていない。盲僧たちは、もっぱら音のよい薩摩琵琶を用いているからである。しかし、楽器そのものは、宝山検校の琵琶以外にも残されている。筆者は修理の手が入っておらず、かなりの年数を経たと思われる琵琶を、日南市の真景山長久寺で見ることができた。同様の形態を持つ琵琶は、中島常楽院、えびの市三徳院や、大口市の盲僧教会など、鹿児島県から宮崎県にかけての盲僧寺院などで、数面所蔵されている。これらが、薩摩盲僧琵琶の典型的な形であると考えて、「宝山検校の琵琶」とともに、本考察の資料とする。

長久寺は、江戸時代には飫肥藩領にあり、九州地方の多くの盲僧座と同様、天明期に京都の青蓮院の配下となり、飫肥藩の盲僧の拠点となっていた。明治維新後に盲僧組織が再編成されたおりに、それまでは上野寛永寺の支配下にあった薩摩地方の盲僧とともに天台宗常楽院法流に所属することになる。第二次世界大戦で鹿児島市内の常楽院が全焼し、その後は、2003年まで長久寺に常楽院法流の本部が置かれたため、日南常楽院と呼ばれた。長久寺には、寺の歴史を反映し、さまざまな形態の盲僧琵琶が少なくとも5面ある。うち2面が、典型的な薩摩盲僧琵琶の形を示し、なかでも本稿でとりあげる1面は、転手と柱を欠くものの、原型をよく留めていると思われる。

なお、長久寺の盲僧琵琶で、部品欠損のためにデータが得られない場合は、えびの市の三徳院所蔵の2面の盲僧琵琶の調査結果で補うことにする。

4. 江島杉山神社所蔵「漪漣」 一当道座の平家琵琶一

上記2面の薩摩盲僧琵琶と比べる対象としては、東京都墨田区の江島杉山神社所蔵の平家琵琶「漪漣（さざなみ）」をとりあげようと思う。製作の事情や来歴が明らかで、江戸時代の平家琵琶の規範的な形を示すと考えられるからである。

江島杉山神社は、当道座の江戸総録屋敷の敷地内に、杉山検校和一が江ノ島の弁財天を勧請して祀った神社で、後に、杉山検校も合せて祀られた。黒塗りの琵琶箱に入った立派な平家琵琶を所蔵している。琵琶箱蓋裏には次のような由来が朱で記される。

右琵琶則長田左太夫作也去寛政之頃／京師ニ老松浦検校経瑞一秘藏之干後／薩州公藏之前宗匠麻岡検校長歳一賜／之其後先師伝予予秘藏之処検校座中／関東総録職之蒙命無滞所勤務是則与／天女之応護其為報恩謝德奉納之永仰／神徳也／干時文久二壬戌三月 前田流平家宗匠／惣録福住検校順賀一誌

寛政（1789 - 1791）の頃に京都の長田左太夫が製作、京都の当道座の松浦検校経瑞一が所持、その後薩摩藩主島津斎興の手に渡る。斎興は熱心な平家の愛好家で、江戸で活躍した麻岡検校長歳一のパトロンでもあったところから、この琵琶は麻岡へ、さらにその弟子の福住検校順賀一の手に渡る。福住は江戸の総録の任務を無事終えた感謝の印として、文久2年（1862）にこの琵琶を江島杉山神社に奉納した。琵琶槽内部の墨書きによれば、文政6年（1823）と安政5年（1858）と2回の修理を経ている。2003年にも修理され、欠損していた乗弦と3柱を補い、残る2柱と乗竹も新しくした。このように、漪漣は、平家を専門とするトップレベルの検校たちによって使われてきており、江戸時代の平家琵琶の規範的な形を示すと考えられる。

5. 有村治左衛門の琵琶 一幕末の薩摩琵琶一

薩摩盲僧琵琶と薩摩琵琶との関係を考えるために、有村治左衛門（1838 - 1860）が所持したといわれる薩摩琵琶をここで盲僧琵琶との比較の対象に選ぶことにする。有村は安政7年（1860）の桜田門外の

変で水戸藩士たちに加担した薩摩藩士で、変の直後に自刃している。現在この琵琶は、武蔵野音楽大学楽器博物館に所蔵される（薦田 2004b: 30 - 31）。薩摩琵琶の名人吉村岳城（1888 - 1953）が友人の米沢誠豊にこの琵琶を譲った折の書状が一緒に残されている。それによれば、吉村は鹿児島出身の琵琶奏者伊達熊太郎新蔵からこの琵琶を入手したという。伊達は、薩摩琵琶の製作者としても有名な伴彦四郎の系統を引く。有村が実際に所持していたかどうかは確認できないが、第1柱に孔が開いていることから、鹿児島で作られたと思われ、その他の特徴も筆者が今まで見た薩摩琵琶のなかでは古風である。

6. 4種の琵琶の比較

以下で、上記4種4面の琵琶の比較をする。文中では、平家琵琶、古盲僧琵琶、薩摩盲僧琵琶、薩摩琵琶のサンプル名を、それぞれ「漪漣」、「宝山」、「長久寺」、「有村」と略す。古盲僧琵琶と薩摩盲僧琵琶はよく似ているので、強いて区別せず、単に盲僧琵琶と称する場合もある。

はじめに全体の輪郭を比べる。次に柱の形、高さ、位置について確認する。平家琵琶から盲僧琵琶が生まれるときに、まず、柱が高くなつたと考えるからである。柱が高くなれば必然的に、弦の両端を支える乗弦と覆手の形が変化するはずなので、その次にこの二つの部品の変化の過程を明らかにする。最後に、それ以外の各部の変化のおもなものを指摘し、それらの変化の過程を考察する。

6-1. 全体の輪郭・大きさ・撥面

一見して、宝山と長久寺は、下膨れの胴の輪郭が、漪漣に似ている。盲僧琵琶までは平家琵琶の輪郭を残していることが明らかである。有村だけがやや高い位置で胴幅が広くなつておらず、前の三者と異なつていて、薩摩琵琶の輪郭は、独自のものであることが分かる。胴の幅は、漪漣 31.9cm、宝山 28.7cm、長久寺 27.2cm、有村 33.0cm、琵琶の全長は、漪漣が 82.5cm（胴下端から乗竹上まで）あるのに対して、宝山は 75.6cm、長久寺は 75.0cm とどちらも小さい。九州各地の盲僧琵琶は、この二面に限らず、総じて平家琵琶より小型である。薩摩琵琶の有村は、91.4cm と漪漣より大型である。また、腹板が大きく膨らみ、3.0cm も盛り上がつておるのは有村だけで、他の3面は膨らみが小さい（漪漣 0.8cm、宝山平ら、長久寺 1.0cm）。薩摩琵琶は平家琵琶よりやや大きめで、腹板が大きく膨らんでいるが、これは盲僧琵琶の時代にはなかった独自の特徴であることが分かる。撥面に平家琵琶は鮫革を貼り、黒く塗ったり絵を描いたりする。漪漣は金無地に塗つてある（図1-1）。薩摩盲僧琵琶は、撥面に革をはらず、鯨骨や象牙で上下に腹筋を入れて区切り、間を漆で黒く塗るようになる（図1-2, 3）。腹筋と黒塗りの撥面は薩摩琵琶にも受け継がれている（図1-4）。撥面が区切られていることは、琵琶であるための大条件と見なされたのであろう。

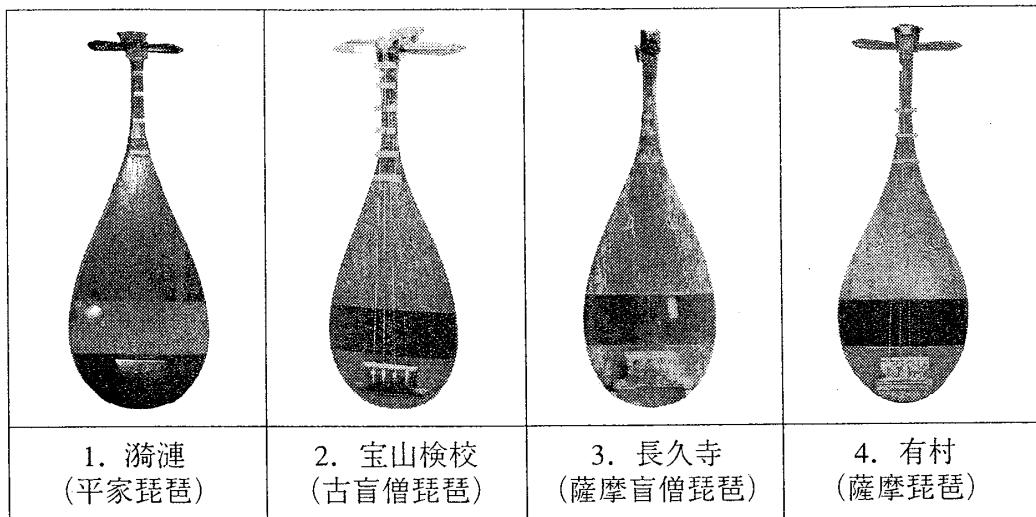


図1 平家琵琶から盲僧琵琶へ、盲僧琵琶から薩摩琵琶へ

6-2. 柱の高さ・形・位置・サワリ柱

琵琶と三味線の大きな違いは、柱の有無である。柱の数によって出せる音の数が決まってしまう琵琶で、どのような音高でも自由に出すことができる三味線のまねをするとき、いちばん簡単な方法は、琵琶の柱を取り去って三味線の棹のようにしてしまうことである。ところが、当道座は「盲目の琵琶は麻の糸をかけこまを致打付候事」（下線筆者。こま（柱）を頸に打ち付けて固定する）と柱を取る事を禁止している（当道座 1786 - 94?、翻刻 1993: 277）。残された方法は、二通りである。柱の数を増やすか、柱を高くして、押干奏法（柱の間を押し込んで音の高さを変化させる奏法）を使うかのどちらかである。薩摩では後者の方法が発達したと考えられる。そこで各琵琶の柱について比較を試みる。

【柱の高さ】

各琵琶について、第1柱の高さを比べてみる。盲僧琵琶の長久寺は、柱が欠損しているので、柱のある三徳院所蔵の総黒塗りの薩摩盲僧琵琶の柱の高さを測ることにする（略称「三徳院」）。平家琵琶の滴漣は1.8cm、盲僧琵琶の宝山は2.7cm、同じく三徳院は3.4cm、薩摩琵琶の有村は3.4cmというように、順次高くなっている。最近の薩摩琵琶は有村よりさらに高く、4.0cm程度のものもある。滴漣、宝山、三徳院とも、柱は後の修理によるものだが、柱の高さは頸から弦までの距離でほぼ決まるので、製作当初の柱の高さも似たような値だったと推測される。

【柱の形】

図2は、4種の琵琶の第2柱の形を比較したものである。平家琵琶の滴漣の柱は、雅楽琵琶の柱と同様、横長で弦の側の幅が狭い台形をしており、背が低い。盲僧琵琶の宝山では弦の側の幅が広がり背も高くなって、ほぼ正方形に近くなる。三徳院ではさらに背が高くなり、縦長の長方形の形になる。薩摩

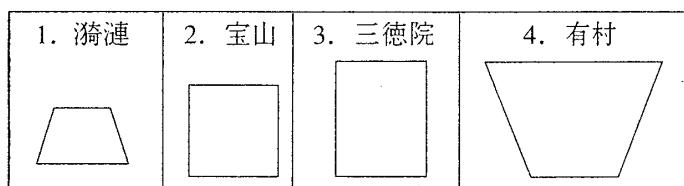


図2 第2柱の形

琵琶の有村では、背が高いだけでなく、弦の側の幅が広い逆台形になっている。薩摩琵琶の柱が逆台形をしているのは、弦を縦方向に押し込むだけでなく、横方向に引く技法が用いられるようになったためであろう。弦を横に引いたときに、

柱から弦が外れないように、柱上面の幅が広がったと考えられる。柱の形は押干奏法の発達とともに台形から逆台形へと変化していったことがわかる。

【柱の数と位置】

琵琶の柱の数の変遷を見ると、平家琵琶の前身である雅楽琵琶は4柱、平家琵琶は5柱、薩摩盲僧琵琶は4柱、近代薩摩琵琶は4柱である。宝山は現在6柱を持つが、古い写真によれば、柱は欠損しており、接着痕から見てかつては4柱または5柱であったようだ（図3）。その位置は、長久寺の柱の接着痕と似ている。

岩波映画「薩摩盲僧琵琶」（1973年度芸術祭参加作品）を撮影する際に、富貴島順海所蔵の盲僧琵琶に2柱を足し、6柱にして撮影が行われたという（富貴島弘海2001年8月インタビューによる）。同様の修理が宝山検校の琵琶に対しても行われたものと思われる。盲僧琵琶はもと6柱であったという田辺尚雄の説の影響を受けたものであろう（田辺1956:8巻325）。



図3 修理途中の宝山
(日置市教育委員会提供)

図4に、雅楽琵琶から近代薩摩琵琶までの柱の数と位置の変遷を示す。平家琵琶の5柱が、薩摩盲僧琵琶でなぜ4柱になったかを考えるために、平家琵琶の柱の位置の歴史的変遷を理解しておく必要がある。平家琵琶の柱は早くから5柱であったと考えられる。平家が誕生した鎌倉時代の琵琶法師を描く図像資料には、すでに柱が5つ認められるものがあるからである（たとえば「法然上人伝絵巻」（増上寺蔵）、「一遍上人絵伝」（卷6片瀬の浜・卷7京都、清淨光寺蔵））。平家琵琶では開放弦の完全5度上に第5柱が置かれる。第Ⅲ弦の開放弦をミとした場合、第5柱はシになる。それによって、第Ⅲ弦第4柱のラとともに重要な役割を果たすシの音が、左手のポジションを変えずに奏せる（図4 平家琵琶（『柱経』18世紀半以前に成立））。不要になった第1柱（第Ⅳ弦、シ）は、サワリの山として利用され、やがて乗弦寄りに移動し、あわせて、第2、第3柱も移動する（図4 平家琵琶（現行））。18世紀末頃成立の『平曲譜』にも同様の配置が見られる。その結果、平家琵琶では、第2柱が不要の柱となった（薦田2003:356-358）。この第2柱を取り去ると、第1柱と第2柱の間が大きく開いている薩摩盲僧琵琶の柱の並び方に近くなる。盲僧琵琶が成立する過程で、柱が高くなり押干奏法が発達したために、サワリに用いられる第1柱以外の3柱は押干がしやすいように、間隔が狭まったと考えられる（図4 薩摩盲僧琵琶）。それを引き継いだのが、近代の薩摩琵琶であろう（図4 近代薩摩琵琶）。

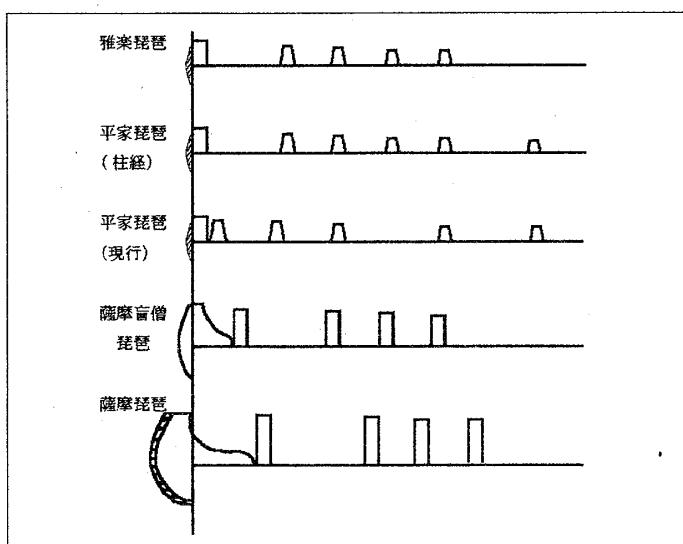


図4 各種琵琶の柱の位置の変遷

【サワリの山としての第1柱】

前述のように、現行の平家琵琶で、第1柱はサワリの山として用いられている。薩摩盲僧琵琶の第1柱もまた、平家琵琶同様サワリの山として用いられた可能性が考えられる。その理由は上述のような歴史的変遷が考えられることだが、そのほかにも4つほど理由をあげることができる。まず、現在の薩摩琵琶は4柱を持つが、第1柱を使う頻度は他の柱にくらべてずっと少なく、しかもその手は弾きにくく、きちんとした音高も出しにくい。次に、第1柱は「大干の柱」と呼ばれるが、他の3柱は、「上柱」「中柱」「下柱」といい、名称も第1柱だけ別扱いである。また、第1柱の上面には象牙などの硬い材を貼り付け、柱の形も逆台形ではなく、長方形である場合が多い。宝山は古い柱が失われているが、三徳院の黒塗りの盲僧琵琶の第1柱には、象牙が貼られている。さらに、現在、薩摩琵琶の開放弦のサワリは、乗弦上の弦道という溝の部分で付けられるが、そもそも溝のなかでサワリの調整をすることはむずかしい。盲僧琵琶の宝山の弦道の溝幅は0.9cm、長久寺0.8cmと平家琵琶の漪漣0.6cmよりは広いが、薩摩琵琶有村の溝幅1.2cmより狭い。ここでサワリを付けるのは難しかったのではないだろうか。そうであれば、薩摩盲僧琵琶では、平家琵琶同様に第1柱をサワリの柱として利用したのではないかと考えるのである。

6-3. 乗弦

柱が高くなり、押干奏法によって弦に強い力がかかるようになれば、弦を支える両端の部品、つまり乗弦と覆手もそれに応じて大きく頑丈になるはずである。弦蔵からでた弦を支えるのが乗弦である。三味線の上駒にあたる。いっぽう、腹板上で弦の下端を固定するのが覆手である。

図5-1の、平家琵琶漪漣の乗弦の高さ（図で左方向への長さ）は1.9cm、雅楽琵琶よりやや高い程度である。盲僧琵琶宝山は2.9cm、同じく長久寺で3.0cm、薩摩琵琶の有村は4.1cmある。平家から盲僧琵琶、薩摩琵琶とこれも次第に乗弦の高さが高くなっていることがわかる。それにあわせて、乗弦の形も倒れにくいように、反手方向と頸方向両方に大きく頑丈に発達していった。

平家琵琶では、弦蔵から出た弦は、乗弦で約90度弱向きを変えて、腹板の上に向かう（図5-1漪漣）。弦が向きを変える部分には、乗竹という小さな竹片を貼り、曲面で弦の向きが変わるように工夫されている。こうすれば弦が乗弦の角で擦り切れにくくなる。

図5-2は、古い平家琵琶を筑前琵琶の製作者が修理した例である。筑前琵琶のように押干奏法を用いると、乗弦に力がかかるため安定が悪くなるために、平家琵琶の奏法を知らなかった修理者は、頸方向に三角形の支えを付け、乗竹も大きくして、乗弦が安定するように工夫したようである。この乗弦は、たまたま近年の誤った修理のためにこのような形になったものだが、図5-3の、盲僧琵琶宝山の乗弦と比べてみると、その輪郭がよく似ており、平家の乗弦が盲僧琵琶の乗弦の形に変化した過程をよく物語っている。ただし、宝山は、三角形の支えを乗弦と一本で作ってある。長久寺の琵琶も同様である（図5-4）。薩摩盲僧琵琶では、柱が高くなるにつれて、乗弦も高くなり、その乗弦が倒れないように、頸方向に支えが付くような形に変化したのである。薩摩琵琶になると、乗弦の高さ（図で左方向）はさらに高くなり、それに応じて乗弦の支えの足の部分も頸方向に長く延びることになる。有村は塗装してあって乗弦の形が分かりにくないので、図には筆者所蔵の薩摩琵琶の写真を載せる（図5-5）。

盲僧琵琶宝山では、弦が向きを変えるところで、乗弦本体も曲線にして乗竹の曲線と一つながりになるように工夫されている。乗弦下で、弦は乗弦から離れるが、この位置は、平家琵琶では反手上端から1.0cm程度下がったところである。宝山も、乗弦下と反手材の位置関係は似たようなものである。ところがおなじ盲僧琵琶でも長久寺（図5-4）では、乗弦下と反手材上の位置がほぼ同じである。近代薩摩

琵琶の乗弦はより大きく頑丈に発達しており、乗弦下は、反手材上より、さらに高い位置にある。

弦蔵からでた弦は弧を描いて乗竹の上を通り、弦道に達する。漪漣の乗竹の厚みは0.7cm、平家琵琶としてはやや厚めである。盲僧琵琶宝山ではこれに対応する部分が1.9cm、同じく長久寺は1.4cmある。薩摩琵琶の有村は非常に厚く大きく4.4cmある。こうなると、この部分も乗弦と一木で作り、弦のあたる表面だけに竹が薄く貼られるようになる。

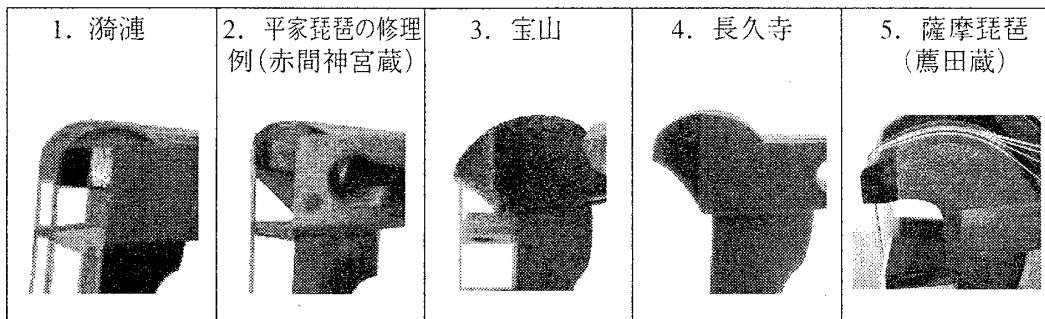


図5 平家琵琶から薩摩琵琶への乗弦の変化

なお、図5では、猿尾と呼ばれる頸上端背面の形も、平家琵琶から盲僧琵琶を経て、薩摩琵琶になるに従って、次第に角がとれて丸くなっていく様子がわかる。

6 - 4. 反手・海老尾・転手

反手は海老尾と糸蔵からなる。糸蔵の先端に乗弦が付いている。この部分も含めて反手と呼ぶこともある。乗弦部分が大きく発達してくると、反手の反対側にある海老尾の形も変わってくる。平家琵琶ではわずかに斜め上方向に伸びていた海老尾も（図6-1）、盲僧琵琶の宝山や長久寺（図6-2, 3）では、多少湾曲してくる。薩摩琵琶の有村では、乗弦も大きく高くなっているので、海老尾もバランス上、大きく高く盛り上がることになったと思われる（図6-4）。

乗弦と海老尾が大きくなることで、反手全体の長さも変わってくる。乗弦の低く小さい平家琵琶の漪漣で、乗弦の先から海老尾の先までの反手全長は22.8cm、乗弦が高くなり、乗竹の大きさも大きくなった盲僧琵琶宝山は26.3cm、同じく長久寺は26.5cm、薩摩琵琶の有村は28.8cmある。柱が高くなかった結果、乗弦が大きく発達し、それにあわせて、海老尾も大きく形を変えたようすがたどれる。

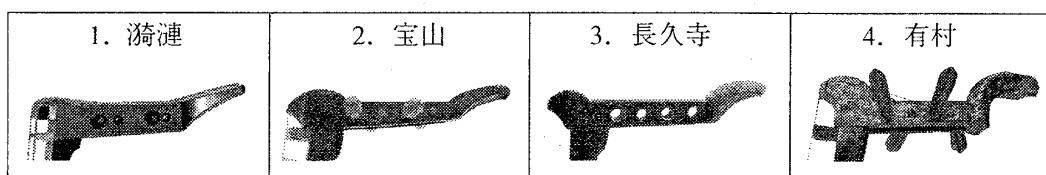


図6 乗弦、反手と海老尾

4本の転手（糸巻）は、平家琵琶の漪漣や、盲僧琵琶の宝山、長久寺とともに、ほぼ水平に互いに平行に反手に差し込まれているが、薩摩琵琶の有村では、放射状にわずかに上向きに差し込まれている。上向きに差し込まれるのは、乗弦や海老尾とのバランスを取るためにあろう。また、有村では、転手が放射状に差し込まれているが、これは、演奏中でも調弦したい転手を間違いなく握れるようにするための工夫で、押干奏法を多用する薩摩琵琶では頻繁に調弦をする必用が生じた結果であろうと考える。

6-5. 覆手、支柱、陰月

柱が高くなり、押干奏法が用いられるようになると、弦の下端を固定している覆手の形や構造にも変化がおきる。まず、覆手先（図7では、覆手の上端）の腹板からの距離が大きくなる。押干奏法をほとんど用いない平家琵琶の漪漣で1.1cmなのにに対して、宝山検校の琵琶で1.5cm、長久寺で1.6cm、有村で2.0cmと、盲僧琵琶から薩摩琵琶へと次第に大きくなっている（図7）。

また、平家琵琶には、覆手の下に支柱はないが、盲僧琵琶の宝山と長久寺も、薩摩琵琶の有村も、覆手の下には支柱が入っている（図7）。押干奏法により、弦に力がかかるので、その力によって覆手が倒れないよう、支えている。支柱は、薩摩盲僧琵琶では太く短い（図7-2, 3）。18世紀前半に活動した川上元正という琵琶奏者がいるが、その頃の琵琶は「支柱が非常に大きく、覆手も非常に低」という記述があり、宝山も長久寺も、その記述によく一致している（上田 1912: 289）。

覆手の輪郭は平家琵琶漪漣と盲僧琵琶宝山と長久寺が同じ形を持ち、薩摩琵琶有村だけが、異なっている（図8）。漪漣や宝山では、覆手先の両端が鋭角に尖っている。長久寺も右端がかけているものの、左端は尖っている、いっぽう有村では覆手先両端はほぼ直角で、途中からくびれていく。

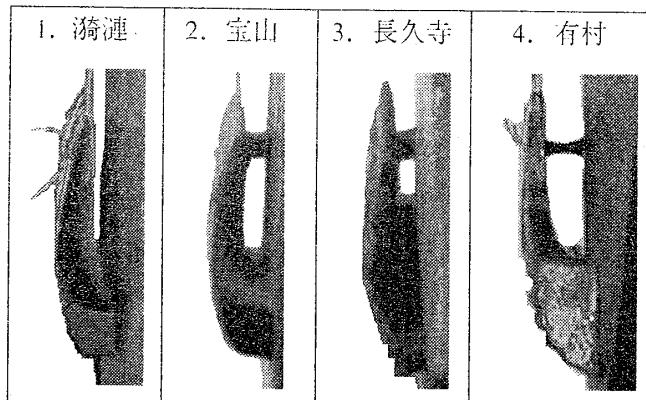


図7 覆手側面：覆手先の高さと支柱の有無

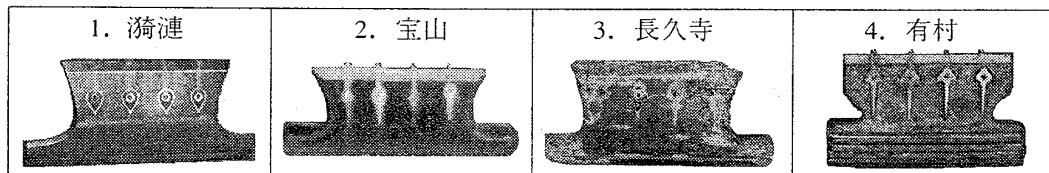


図8 覆手の輪郭と通弦孔の装飾

覆手に開けられた通弦孔の周りの装飾の形も、平家琵琶では雅楽琵琶同様、猪目型（水滴型）だが、薩摩琵琶では丁字花とよばれる独特の形をもっている。盲僧琵琶の宝山や長久寺の通弦孔装飾は、この中間の形を示す。宝山は、第1弦と第3弦（右から）がオリジナルで、第2、第4弦は後補である。また、長久寺は、通弦孔周囲の装飾が欠損している。しかしこの二つの盲僧琵琶が、猪目と丁字花の中間的な装飾の形をしていたことは、あきらかに見て取ることができる。

覆手の下の腹板（胴）には隠月という大きな音孔が開いている。平家琵琶の隠月は、雅楽琵琶の隠月と同じように、横長の楕円または角を落とした長方形である（図9-1）。撥をここへ差し込んで持ち運ぶことが出来るよう、隠月の縁を腹板に対して斜めに切ってあることも雅楽琵琶と同じである。『一遍上人伝絵』（巻6 片瀬の浜）に描かれた琵琶法師の琵琶は、撥を隠月に収納している。薩摩盲僧琵琶は宝山も長久寺も、やや小型になるものの、隠月は四角い形を残し、平家琵琶同様斜めに切り込まれている（図9-2）。薩摩琵琶になると、隠

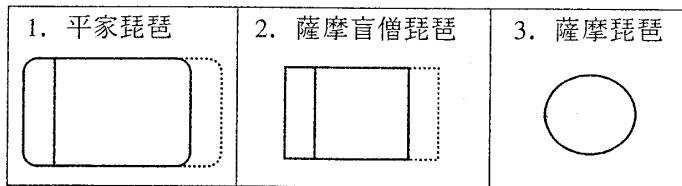


図9 隠月

月はずっと小さくなり、直径（短径）が2.0cmほどの円形あるいは、横長の橢円形になり、腹板にたいして垂直に孔が切られている（図9-3）。

6 - 6. 半月

腹板上の共鳴孔である半月は、平家琵琶では、中央に突起を持つ三日月型の孔が2つ、左右対称に、ほぼ平行に付けられているが（図10-1）、盲僧琵琶では、孔の周囲に別材で縁取りが施され、また左右二つの半月が平行ではなくてハの字型をなすように付けられる（図10-2, 3）。薩摩琵琶では、有村の例のように三日月が次第に湾曲度を強めていくものが多い（図10-4）。また、盲僧琵琶では、縁取りが平家琵琶の半月ほどの大きさで、孔そのものは小さい。薩摩琵琶では、孔本体はさらに小さくなり、形もあけやすい円形となっているものもある。

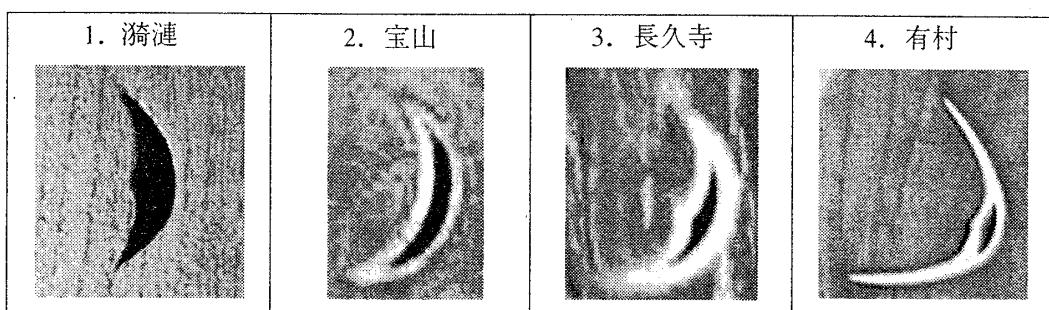


図10 半月

6 - 7. 撥

琵琶の撥は、撥先が扇型に開いている。その開きの幅は平家琵琶から盲僧琵琶を経て、薩摩琵琶へとだんだんに大きくなっていく（図11）。平家琵琶の濱漣の撥で12.2cm（下の写真は薦田蔵の撥）、盲僧琵琶の長久寺の撥は2枚あるが、ひとつは17.7cm（A）、もうひとつは18.0cm（B）である。後者は写真右端部分で欠けているので、もとは20cm程度の開きがあったであろう。現在の薩摩琵琶の撥先は大きく広がり、有村は25.5cmある。同じ薩摩琵琶でも、明治末に成立した錦心流の撥はさらに開きが大きく、30.0cmを越えるものもある。

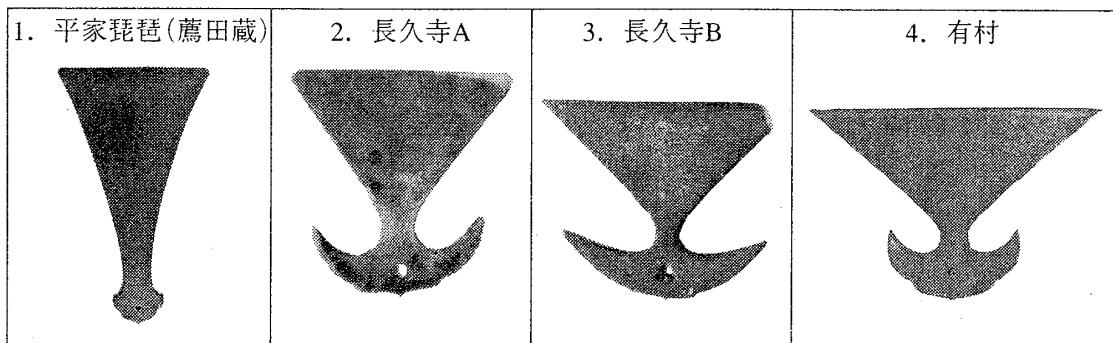


図11 撥

クズレと呼ばれるトレモロ奏法の発達と、琵琶の抱え方が、横抱きから立て抱きになったことに伴って、撥先が広がっていったと考える。薩摩琵琶奏者の間で、薩摩の武士は、演奏中に敵に襲われたときに尖った琵琶の撥を投げつけて応じたという話が伝えられている。しかし、同じ薩摩琵琶の中でも、古

風な正派より芸能性の強い錦心流のほうが、撥先の広がりが大きいことを考えると、撥の形の変化は、むしろ音楽的な要求によるものであったと考えられる。

7. 薩摩琵琶の成立——結びにかえて

以上、平家琵琶から宝山のような古い形の盲僧琵琶を経て、薩摩盲僧琵琶が生まれ、そこから薩摩琵琶へと変化していった様子を、楽器の形態の変遷から見てきた。

宝山検校の琵琶は、その伝承から考えて、少くとも盲僧座の形成期である18世紀にまで製作時期が遡れると思われる。形態上は、盲僧琵琶のなかでもとくに平家琵琶との共通点が多い。筆者はこのように、平家琵琶に近い盲僧琵琶を一括して「古盲僧琵琶」と呼ぶことにしている（薦田 2004a: 22 - 23）。これら古盲僧琵琶が、宮崎、高千穂、菊池、玉名など九州各地に点在することは、盲僧琵琶の楽器が、どれも平家琵琶から生まれたことを如実に示している。

薩摩盲僧琵琶の形態は、他の九州地域の盲僧琵琶に比べて、もっとも古盲僧琵琶に近く、他地の盲僧琵琶より古態を残していると言える。北九州では、笛琵琶、舟琵琶、鶯琵琶などより三味線風の盲僧琵琶が生まれたのに対して、薩摩では、ひとたび古盲僧琵琶が成立すると、その後は、柱の高さと撥の大きさ以外は大きく形が変化することなく伝えられていったのではないだろうか。

以上の結果を受けて、現在のような薩摩琵琶の楽器の成立年代を、筆者は、天保年間から幕末の間ではなかったかと推測している。18世紀末の紀行文である橋南溪の『西遊記』には、薩摩地方の琵琶が「其形も平家琵琶などよりは小さ」いと記される（橋 1783 - 85。再録 1991: 190）。現行薩摩琵琶は平家琵琶より、大型であることを考えると、この時点では、まだ宝山や長久寺、三徳院の薩摩盲僧琵琶のような小型の楽器が用いられていたのである。『西遊記』に池田甚兵衛と宝生という二人の琵琶奏者の名があがる（橋 1783 - 85。再録 1991: 190 - 191）。この二人の後に出てとされる川上元正という琵琶奏者の時代にも、「琵琶は概して其形が小さい（中略）。その支柱が非常に大きく、覆手も非常に低」いとされている（上田 1912: 289）。これらはすべて薩摩盲僧琵琶の特徴と一致する。19世紀に入っても、まだ、現在のような薩摩琵琶はできていなかったとみてよいであろう。

今日、名前の残る薩摩琵琶の製作者の中でもっとも古いのは、新穂甚兵衛（1809 - 1894）、ついで伴彦四郎（1837 - 1897）である（越山 1983: 223,129）。新穂や伴の琵琶は今日も用いられているが、それらは、すでに大型の薩摩琵琶の形になっている。新穂が成人する天保(1830-1844)ころから幕末にかけて、現行の大型の薩摩琵琶の形ができあがったのではないだろうか。薩摩琵琶の成立を戦国時代の武将島津忠良に求める説が広く行われているが、盲僧琵琶の形態を見る限り、近代薩摩琵琶の楽器の成立は19世紀まで下ると判断せざるを得ない。

なお、本稿を執筆するに当たり、日南の長久寺（旧日南常楽院）、吹上町歴史資料館（日置市教育委員会）、三徳院、武蔵野音楽大学楽器博物館には、こころよく資料の掲載をご許可頂いた。ここにお名前を記して感謝の意を表したい。

引用文献

- | | |
|-------|--|
| 岩橋小弥太 | 1923 「盲僧考」 『社会史研究』 10-1: 15 - 26。岩橋 1975 に改稿再録。 |
| | 1923 「盲僧考（下）」 『社会史研究』 10-2: 113 - 120。岩橋 1975 に改稿再録。 |
| | 1975 『芸能史叢説』 東京：吉川弘文館。上記 2 論文の改訂稿を含む。 |
| 上田景二 | 1912 『薩摩琵琶淵源録』 東京：日本皇学館。 |
| 江田俊了 | 1932 『常楽院沿革史』 日南市：常楽院。1990 に日南市常楽院法流事務所より再版。 |

本論文の引用は再版本による。

- 加藤康昭 1974 『日本盲人社会史研究』 東京：未来社。
- 久保七兵衛之英 1780 『御家兵法純粹』 写本。国立博物館蔵。
- 越山正三 1983 『薩摩琵琶』 東京：ペリカン社。
- 薦田治子 2003 『平家の音楽—当道の伝統—』 東京：第一書房。
- 2004a 「琵琶の部」 高桑いづみ『古楽器の形態と音色に関する総合研究』 7-32。
- 2004b 『武蔵野音楽大学 楽器博物館研究報告 IX 2003 琵琶』 東京：武蔵野音楽大学。
- 鈴木孝庸 1993 「翻刻『当道大記録』」。上参郷祐康編『平家琵琶一語りと音楽』 237-390。
春日部：ひつじ書房。
- 橋南溪 1783-85 成『西遊記』。新日本古典文学大系本（1991 東京：岩波書店）。底本は龍谷大学所蔵の写本。1795年の版本には、写本との間に記事の出入りがある。
- 田辺尚雄 1947 『日本の音楽』 東京：中文館書店。
- 1956 「琵琶」『音楽事典』 第8巻 322-327 東京：平凡社。
- 1964 『日本の楽器』 柏市：柏出版。
- 当道座 1786-94? 『当道大記録』（写本）。翻刻は京都府立総合資料館本を鈴木孝庸 1993。
- 中山太郎 1934 『日本盲人史』 東京：昭和書房。1965、1976に八木書店より複製刊行。
- 西岡陽子 1996 「解題」 荒木博之・西岡陽子編著『地神盲僧史料集』 27-40。
- 村山道宣 1978 「琵琶 忘れられた音の世界」『あるくみるきく』 135: 4-30。